

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

イスラームの語源は「平和」か

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2019-01-08 キーワード: 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009309

—中東地域における文化資源の現代の変容と個人空間の再世界化の研究にむけて

文・写真 西尾哲夫

イスラームの語源は「平和」か



サウジアラビアの援助で建設されたニューカレドニアのモスクの入り口。アラビア語で信仰告白の文が書かれている(2010年2月)。

コーランとビニール袋

国立民族学博物館(以下、民博)は学校での異文化理解をたすける教材として、みんぱくという学習キットを貸しだしている。みんぱくには、子どもサイズの民族衣装、生活用具、学用品、楽器などがはいており、子どもたちに異文化をはだで感じてもらおうという趣旨で開発された。

みんぱくの中には「イスラム教とアラブ世界のくらし」と題するキットもあり、男女の民族衣装、お祈りの方向がわかる時計、こよみ、ラクダのミルク容器、数珠などのほかにコーラン(クルアーン)もはいている。

最近、エジプト出身の少女が入学してきたある学校の先生が、このキットをクラスで紹介した。先生の意図としては、日本人にはあまりなじみのない中東からやってきた少女をクラスの子どもたちにとけこませたい、これを機に子どもたちに中東の文化を紹介したいということのようだった。キットを手にした少女が自国の文化について説明すると、子どもたちは熱心に聞いていたそうだ。説明をつづける彼女は、「コーランは聖なるもので、ムスリム(イスラム教徒)でないひとは素手ではさわれないから、ビニール袋に入れてほしい」と先生に頼んだ。

先生はコーランをビニール袋に入れ、その旨をみんぱくの担当者に報告してくれた。

他者の立場をおもんばかり、その人がころから尊んでいるものを粗雑にあつかわないというのは、人としての当然のたしなみだろう。少女がころから尊んでいるイスラーム(イスラム教)の聖典コーランを、少



みんぱく「イスラム教とアラブ世界のくらし」(国立民族学博物館企画課提供)

女の頼みどおりビニール袋に入れてあげた先生の判断はまちがってはいなかった。この後、民博でもみんぱく担当者や中東研究者のあいだで検討がなされ、コーランは保存用のビニール袋にはいった状態で貸しだされて(現在は特別な保護袋に入れている)、コーランにさわるときには手袋をするということになった。日本在住のムスリムのなかには、「ムスリム以外のひとがコーランを素手でさわってはいけない」と信じている人がいるからというのがその理由だった。私を含め、民博の中東研究者はその理由には賛同しなかったが、貴重な本をていねいに扱ってほしいということでは納得した経緯がある。

ただし一般的なイスラームの教えのなかには、「(異教徒が)コーランを素手でさわってはいけない」というものはない。どうして彼女はそうに思いこんだのだろう。また公的な存在としての民博の対応は正しかったのだろうか。

ここでは、「イスラームとは『平和』という意味」という、このところよく聞かれるようになった言説を検証することで、コーランとビニール袋の関係を探っていこう。遠まわりになるが、グローバル化のなかで、いかに個人と公共的コミュニケーション空間の関係が変容しているかについて考えるための一助としたい。

イスラームとは「平和」という意味か

最初に確認しておくが、アラビア語のイスラームに「平和」という意味はない。ところが世間では「イスラームの語源は『平和』である」という言説が流布している。少しだけ例を挙げてみよう。

「イスラム教は、理解しやすい。なぜなら数学のように、合理的にできているからだ。『イスラム』は平和という意味。さまざまな由来の民族、集団が矛盾なく平和に共存することを目的とする。そのため人びとが、イスラム法に従うことを要求する。」(「イスラム教とは何だろうか」—The Page 2015年2月4日付。橋爪大三郎)

「アラビア語で『平和』を意味する『サラーム』から派生したイスラムが大切にするのは正義と平等」(「特集ワイド 本当の「イスラム」を知る5冊」—毎日新聞東京版夕刊2015年2月12日付。宮田律)

「イスラームとは、アラビア語で『平和』を意味する『サラーム』という言葉から生まれています」(『大人も子どももわかるイスラム世界の「大疑問」』講談社+α新書、2002年4月20日初版[最新版も変更なし]。池上彰)「周知のことかと思いますが、イスラームの定義をもう一度申しあげれば、イスラームは字義的には『平和』を意味し、聖典クルアーンによって体系化された平和な暮らしを人々に約束するアッラーの宗教です。」(日本在住ムスリムのHP)

これらの表現を整理すると、①イスラームはアラビア語で「平和」を意味するサラームを語源とする、②イスラームは「平和」を意味する、という2種類の理解が含まれていることがわかる。「イスラームは平和の宗教である」「イスラームは平和的である」という言説は、9.11同時多発テロ以降によくみられるようになった。時のジョージ・ブッシュ大統領も「イスラームとは平和だ」と述べている。これには、過激な思想をもつ一部のムスリムとアメリカ市民として穏健に暮らしているムスリムを区別しようとする政治的配慮がある。これに同調するムスリムも同じような表現を多用するようになった。現代イスラーム事情に詳しい飯塚正人から聞いたのだが、日本でも同時期に東南アジア出身のムスリムがこの表現を使いはじめたらしい。

では本題にはいろう。アラビア語のイスラームとは、本当はどのような意味なのだろう。これを知るには、少しばかりアラビア語の説明が必要になる。

アラビア語の単語は基本的に3つの語根子音からつくられる。初学者用のテキストにはかならず登場する

用例を挙げておこう。

k-t-b:「書くこと」にかかわる語根

kataba:「彼は書いた」

kitāb:「本」 kātīb:「書記」 kuttāb:「コーラン学校」

maktab:「机、オフィス」 maktaba:「図書館、書店」

これらの単語には3つの子音(語根という)k-t-bが含まれており、「書くこと」あるいは「書いたもの」にかかわる意味をすべての単語が共有している。このようにアラビア語のほとんどの単語は、3つの語根子音をもとに派生パターンに応じてさまざまな意味をもつことになる。

では問題のサラームsalām(平和)はどのように運用されるのだろうか。サラームsalāmの語根はs-l-mとなり、動詞salimaの意味は「(ここが)安らかである」という心理状態を指し、転じてモノ(コト)が「安全である、まっとうである」となる。アラビア語のあいさつ「アッサラーム・アライクム」は「あなたがたの上に平安あれ」となる。

次にイスラームislāmについてみていこう。islāmの語根はs-l-mでまちがいないのだが、原義は何だろう。

islāmは動詞aslamaの動名詞であり、この形の動詞は動詞派生形IV形とよばれ、本来は原形動詞に対して「使役」の意味がかわる。一般的な辞書によると^{注)}、aslamaには大きく3つの意味がある。1) (物などの権利をだれかに)譲りわたす、ゆだねる、2) (アッラー=神に自らを)ゆだねる、3) イスラームに帰依する、ムスリムになる。このように「使役」の意味はなく、原形動詞との関係があいまいである。イスラームとは「自らをアッラーにゆだねること」、したがって「アッラーへの絶対帰依」ということになる。

イスラーム世界とはどこか

さて、イスラームの辞書的な意味がわかった。では、どうして「イスラームは平和という意味である」という誤解が生じたのだろうか。この背景には幾重にもなった「あいまいさ」がある。言語学的な理解にとまなうあいまいさだけでなく、イスラーム世界をとらえるあいまいさ、ムスリムが世界をとらえるあいまいさ、西洋化した日本人が世界をとらえるあいまいさ、政治的意図がからんだダブルスタンダードをめぐるあいまいさ、等々である。

そもそもイスラーム世界とはどこを指しているのだろうか。羽田正(2005)によれば、大きく次の4つにわけることができる。

- 1) 理念的な意味でのムスリム共同体
- 2) イスラーム諸国会議機構
- 3) 住民の多数がムスリムである地域
- 4) ムスリムの支配者がイスラーム法によって統治している地域(歴史的なイスラーム世界)

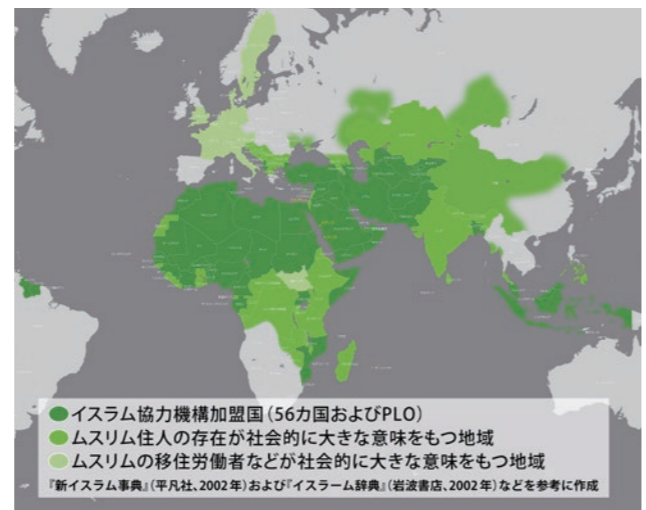
つまり、ひとことでイスラーム世界と言っても、つかう人や状況によって意味する/される範囲は異なってくる。

簡単な説明をくわえておこう。理念的な意味でのムスリム共同体とは、「現実には存在せず、ムスリムが理念として頭の中で意識しているムスリムすべてを包摂する『想像の共同体』である」(羽田 2005: 7)。

2)のイスラーム諸国会議機構(2011年以降はイスラム協力機構)は、イスラーム諸国の協力や連携を目的として設立され、ムスリム住民が多数を占める地域から57カ国が参加している。ただし、参加国の中にはウガンダやガボンのようにムスリムが少数派である国もあり、逆に、多数のムスリム住民が暮らしている中国やインドは参加していない。

3)と4)つまりムスリム住民が多数を占めており、ムスリムの支配者によって統治されてきた地域については、トルコ、エジプト、サウジアラビア、イラク、イランあたりをイメージする人が多いのではないだろうか。

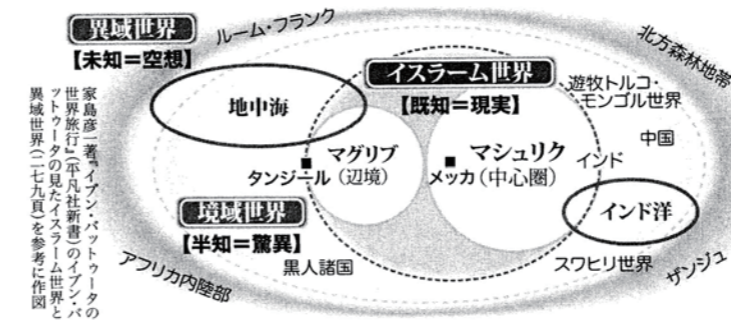
伝統的なイスラーム法学の世界観では、ダール・アル



イスラームの広がり(国立民族学博物館西アジア展示より)

イスラーム(イスラームの家)とダール・アルハルブ(戦争の家)という対立するふたつの概念で世界をとらえてきた。このため、本来は「奮闘、努力」を意味するジハードということばは、非イスラーム世界であるダール・アルハルブをイスラームの家つまりダール・アルイスラームに組み入れるためのおこないとしても解釈される。ここでは世界が対立的、二元的にとらえられている。

いっぽう、たとえばアラビアンナイトなどを読むと、イスラーム世界を中心核とする同心円的な世界観がみえてくる。このような世界観では、メッカを中心とするイスラーム世界の辺境としてマグリブ(北アフリカ一帯)が設定され、広大な中華世界やサハラ以南のアフリカ大陸は半知らないし未知の異域とされている。つまり、物語中では「イスラーム世界すなわち知識がおよぶ現実の世界」と「非イスラーム世界すなわち驚異と空想の世界」という構造が浮かびあがってくる。



イスラーム文明圏からみたアラビアンナイトの世界(出典: 西尾 2013: 42)

よく知られたアラジンのお話では、「驚異と空想の世界」である中国を舞台に不思議のランプをめぐる物語が展開する。アラジンのかたき役となる魔術師は錬金術をはじめとする知識に詳しく、イスラーム世界の辺境であるマグリブの出身であるという設定になっている。

このようにイスラーム世界は、そのときどきの状況で意味する範囲が流動するため、ムスリムか非ムスリムかを問わず、イスラーム世界を想定するさいにはあいまいさが生じてしまう。ひいてはその世界の構成基盤であるイスラームそのものへの視点もあいまいになる。次に近代以後の日本での状況をみていこう。

西洋化した日本人からみたイスラーム世界

明治以降の日本では、おもに欧米文化を学ぶことに

よって近代化をいそいだ。そのため、なかば無意識のうちに西洋がイスラーム世界にむけた視点をわが視点として身につけることにもつながった。

今でもよく読まれる和辻哲郎の『風土——人間学的考察』は、世界の風土をモンスーン、砂漠、牧場に3分類した。同書には「服従的、戦闘的の二重の性格」をもった「砂漠的人間」というよく知られた一節がある(和辻 1979)。このような視点は、聖書世界に源を発する都市定住民からのイメージに基づいたものと言えるだろう。このようなイメージ、つまり砂漠にいるおそろしい存在に対峙する民族的ノスタルジー(すなわち幻想)が西洋世界におけるイスラーム世界観の基底をかたちづくることになった。聖書に根ざしたこのような考えかたは今でも強い影響力を発揮している。

中東イスラーム世界という呼称にしても、日本人の世界観が西洋からの影響を強く受けてきたことを端的にしめしている。トルコ、エジプト、サウジアラビア、イラク、イランあたりを中心とする一帯は、中東や近東などと呼ばれてきた。言うまでもなくこれは、西ヨーロッパを中心とした位置関係をあらわしている。

中東世界との直接的な交渉に乏しかった近代日本人は、西洋から流入してきたイメージそのままに中東観をつくりあげてきた。なかでも、近代欧米世界での変容をとおして世界文学となったアラビアンナイトが日本人の中東観にあたえた影響は大きかった。アラビアンナイトを欧米語に翻訳したりチャード・バートンらの個人的な嗜好によって、原作にはない過度な性的描写が加えられた結果、アラビアンナイトは好色文学の代表となった。そのいっぽうでアラビアンナイトは児童文学としても紹介され、現実感のないファンタジーワールドとしての中東世界が、両極端の非現実的なイメージのもとに想起されるようになってしまった。

流動的な定義とイメージ

イスラーム世界にはローマ・キリスト教皇のような宗教的な権威者がおらず、そのときどきの社会事情に応じてコーランの知識に通じた人たちがコーランを解釈して現実に対処してきた。そのため、同じ事象に対

して時代や場所によって異なった方策がとられたり、相反する解釈が併存していたりすることも多い。イスラームはこのような柔軟性、流動性によってコミュニティを維持して



パリのモスク。歴史的建造物に登録され、マグリブ風のミニレットが街並みにとけこむ(2008年2月)。

上掲のような歴史的な経緯や地理的な条件などいくつもの要因が重なった結果、イスラームやイスラーム世界ということばが意味する範囲も、状況に応じて大きく変動してしまう。一例として、ある世界的指揮者のことばを挙げておこう。その指揮者は作曲家ベートーヴェンの先進性にふれ、「フランス革命後の価値観の揺らいだ時代を生きたベートーヴェンはとりわけイスラームの音楽文化を多用しています」と述べており、記事には「伝統と栄光の名門と奏でるイスラーム文化薫るベートーヴェン」という見出しがついていた(朝日新聞夕刊広告企画「ぶれステージ」)。

ベートーヴェンは有名な「トルコ行進曲」を残したが、ここで注目すべきなのはイスラームということばが多彩で広大なイメージを喚起している点だ。そしてそれよりも問題とすべきなのは、この記事を送る側と受ける側(読者)が、西洋文化の精髓とされるベートーヴェンとイスラーム文化を無自覚に細い糸でつなげようとしている点だろう。

政治的思惑による使いわけ

2001年9月11日にアメリカで起こった同時多発テロは世界を震撼させた。同時多発テロの直後から、イスラームとムスリムへの風あたりは一気に激化した。アメリカ国内ではモスクへの脅迫、中東系市民あるいは

ムスリムへのヘイトクライムが頻発した。コーラン中の異教徒をめぐる文言が抜きだされて、声高なイスラーム批判が巻き起こった。アメリカとその呼びかけに応じた諸国はアフガニスタンとイラクに出兵した。

しかしながら、中東系住民やムスリムへの憎悪をおさえて平和的な共存をめざす動きは同時テロ発生直後からみられ、「イスラームは平和な宗教であり、善きムスリムはテロリストではない」という言説が主張されるようになっていく。2014年9月、オバマ大統領は国連総会で次のように演説した。「イスラーム教は平和を説く宗教です。世界中のイスラーム教徒は、尊厳と正義感を持って生きることを目指しています。そして米国とイスラームに関して言えば、我々と彼らという区別はなく、あるのは我々だけです。なぜなら、多くの米国人のイスラーム教徒は、わが国の一員だからです」(<https://jp.usembassy.gov/ja/obama-statement-ungeneral-assembly-ja/> 最終閲覧日2018年10月21日)。

グローバルな時代にあっては多様な価値観がいろいろみだれ、文化や民族はたやすく越境していく。ヨーロッパ・キリスト教世界と中東イスラーム世界のユダヤ人の歴史を比較したマーク・コーヘンは、中東イスラーム世界のユダヤ人が同時代のヨーロッパ・キリスト教世界のユダヤ人にくらべて平和と安定した生活を享受していたという従来の見方についての一考をうながしている。そのような見方は、研究者個人をめぐる歴史的状况から影響を受けたというのが彼のとらえかただ。

「イスラームとは平和の意味」という説明にしても、イスラームをめぐるあいまいな状況が幾層にも重なり



西安の大清真寺(モスク)の入り口。アラビア語で信仰告白の文が書かれている(2009年3月)。

あった結果、ときどきの状況にもっとも即している、あるいはもっとも都合がよいと思われる選択によって流布するようになったのではないと思われる。次に引用する「さまざまな信仰を持つ人々がイスラームとムスリムへの理解を深める」ことを目的とする団体の文章は現状を反映した用意周到でバランスのとれた見解であると言えるとともに、イスラームが本来的にもつ柔軟性を示している。

「イスラームと平和……を議論するにあたっての最善の出発点は、最近よく聞かれる『イスラームとは平和という意味である。』という言葉について話し合うことでしょうか。もしその言葉を口にする人が、イスラームという言葉自体が平和を意味すると言うのなら、それは全くの間違いです。イスラームという言葉が、アラビア語の平和(サラーム)という言葉と同じ語源であるというのは事実です。このことは、イスラームと平和との間に何らかの関係があることを示しています」(<https://www.islamreligion.com/jp/articles/512/> 最終閲覧日2018年10月21日)。

個人空間の再世界化

ここでコーランをビニール袋にいれてほしいと頼んだエジプト人少女の一件にもどらう。実のところ彼女がそのような思うようになった理由はよくわからない。両親から聞いたのかもしれないし、自分の信仰にとって大切なものが乱暴にあつかわれるかもしれないと案じたとっさの判断だったのかもしれない。日本在住のムスリムのなかには「コーランを素手でさわってはいけない」と信じる人がすくなくからずいるのかもしれない。日本在住のムスリムのなかには中東出身者もいれば東南アジア出身者もいる。イスラームの具体的な実践方法についても、それぞれの文化背景によって様ではない。

だが、少女のクラスの先生がそのような事情を知らなかったとすると、このときの先生にとって、もっとも強力で説得力のあるイスラームの情報源はこのエジプト人少女だったはずだ。先生にしてみれば、少女の頼みに応じてコーランをビニール袋に入れるのが正しい選択だったということになるだろう。

最後にここで議論したエピソードをもう少し大きな視点からみてみよう。グローバル化やIT化によって個人がアクセスできる知識(情報)と公共的コミュニケーション空間の関係が劇的に変化していくような状況下では、文化が資源化されて公共性を獲得するプロセス、および個人が生きるローカルな生活空間とグローバルな社会空間が接合し、個々の人間の社会的動員作用として働くメカニズムにも影響がでるようになった。日本の教室という空間で非ムスリムという他者と対峙した少女の解釈がある種真正なものとして受容されていく過程や、イスラームをめぐる言葉の意味の解釈がムスリム／非ムスリムとの相互作用の中で変化していく過程は、資源化された文化情報に感応する内面的な個人空間の再世界化とよべるような社会的位相が生じていることを示している。

複数の情報を比較し、正確であると判断できる典拠にもとづいて妥当な選択をおこなうには時間と労力が必要になる。イスラームに限らず、異文化について考えるとき、異文化に接するときには、尊敬とシンパシーをもちながらも冷静な視点を失わず、自分にかかわる事案として問題を内面化していく努力が必要だろう。

注

Nishio (1989)では、コーランのアラビア語を代表とする古代アラビア語において、心理状態や感覚を示す動詞の第IV形が起動相(inchotative)の意味を有していたことを仮説として提出した。aslamaは「自らのところが安らかである(ことに気づく)」という意味となる。

【参考文献】

羽田正 2005『イスラーム世界の創造』東京：東京大学出版会。
西尾哲夫 2013『アラビアンナイト 100分de名著』東京：NHK出版。
和辻哲郎 1979『風土—人間学的考察』(岩波文庫)東京：岩波書店。
Cohen, R. Mark 1994 *Under Crescent and Cross: the Jews in the Middle Ages*. Princeton: Princeton University Press.
Nishio, Tetsuo 1989 On the Non-Causative Usage of the Causative Form in Arabic. *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 4(2): 1-45.

※本稿は、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究事業」国立民族学博物館拠点の研究テーマ「中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化」ならびに科学研究費補助事業・基盤研究(B)特設分野「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」の成果の一部である。

にしお てつお

国立民族学博物館グローバル現象研究部教授・副館長。言語学を専攻。「言葉から文化を読む—アラビアンナイトの言語世界」(臨川書店 2015年)など。